

ジオスケープ 正会員 佐藤文彦
 ジオスケープ 正会員 須田清隆
 ジオスケープ 正会員 木下明子

1. はじめに

近年、公共施設、中でも発電所や上・下水処理施設、ゴミ処理施設といった生活施設において、地域の事業に対する理解を得る手段として、環境デザイン・景観設計などといった技術が求められてきている。この背景には、これらの施設の計画される地域の歴史、気候・風土などと密接に関係した独自の表情の喪失があると考えられる。

地域性に配慮した公共施設の景観設計を行っていく上で、地域の持つ独自の歴史や文化、気候などの地域特性を把握する必要がある。

本研究は、地域景観を形成する要素の1つである構造物の色彩に着目し、色彩認知の地域特性を把握するための基礎研究である。

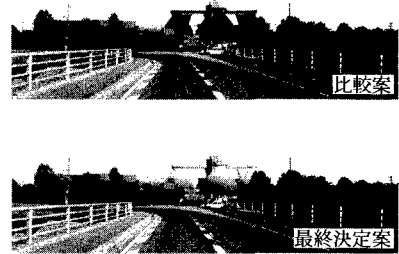
2. 調査目的

図1～2は公共施設の色彩決定を行う際に作成した検討画像の一部である。このようなフォトモンタージュは計画段階において景観設計による効果を確認したり、問題点を抽出することが可能であるため、近年景観設計を行うにあたって効果的な技術として確立していると考えられることができる。

本調査の目的は、フォトモンタージュ技術を利用して、出身地により色彩に対する認識が異なることを確認することである。今回は調査対象者の出身地を北海道・東北・関東地方を東日本、中部・近畿・中国・四国・九州地方を西日本の2つの地域に大きく分けて調査を行う。



図一 1 ポンプ場色彩検討事例



図一 2 消化タンク色彩検討事例

3. 調査内容

今回調査サンプルとして使用したフォトモンタージュ画像は、図一3の画像を基本に作成した表一1に示す9パターンである。色彩パターンの設定にあたっては、まず一般的に多く見られる色彩を屋根及び壁に配色した、それぞれ色相の異なるA～Cの3案を設定し、さらにそれらの各案について彩度を3段階にわけ、合計9パターンを設定した。

調査対象者は男性57人、女性23人の合計80人を対象とした。調査内容は出身地の調査と、9枚の画像から調和性の高いと感じるものを3つ選択してもらうこととした。



図一 3 下水処理施設色彩検討事例

表一 1 調査サンプルの色彩パターン

	A 案	B 案	C 案
1	屋根 : H 0° S 3% B 26% 壁 : H 24° S 15% B 71%	屋根 : H 0° S 68% B 34% 壁 : H 42° S 24% B 69%	屋根 : H 5° S 44% B 18% 壁 : H 30° S 4% B 82%
2	屋根 : H 0° S 1% B 26% 壁 : H 24° S 11% B 71%	屋根 : H 0° S 48% B 34% 壁 : H 42° S 19% B 69%	屋根 : H 5° S 25% B 18% 壁 : H 30° S 2% B 82%
3	屋根 : H 0° S 0% B 26% 壁 : H 24° S 7% B 71%	屋根 : H 0° S 31% B 34% 壁 : H 42° S 8% B 69%	屋根 : H 5° S 11% B 18% 壁 : H 30° S 0% B 82%

H : 色相 S : 彩度 B : 明度

キーワード：公共施設、色彩、景観、認識

連絡先：港区北青山2-5-8 (株)ジオスケープ

TEL 03 (5410) 2366 FAX 03 (5410) 2367

4. 調査結果

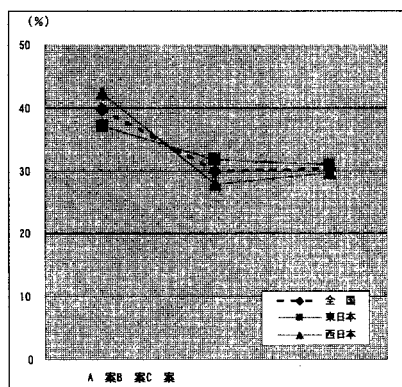
表一2は、今回の調査で使用した9パターンのサンプルモデルごとに、調和性が高いと感じた票数を、東西日本出身者それぞれについて相対化し集計したものである。集計結果から、東日本、西日本の両者とも山と谷はおおむね一致しているものの、個別に見ると東日本出身者がB-3を、西日本出身者がA-2を最も調和性の高い画像として評価していることが確認できる。

図一4は東西日本出身地の違いによる色相の調和性に対する評価をグラフにしたものである。このグラフから、全国平均から見ても、東西日本出身者による評価から見てもA案の色相を最も調和性の高い色彩と評価していることが確認できる。この傾向は特に西日本出身者に顕著に現れている。

図一5は東西日本出身地の違いによる彩度の調和性に対する評価をグラフにしたものである。全国平均をみると彩度の低いものから順に調和性の高い色彩として評価していることが確認できる。これは東日本出身者にも共通していえる傾向である。それに対し西日本出身者は、今回設定した3段階の彩度において、中間レベル(2)に当たる彩度が最も調和性の高い彩度であると評価している点が特徴的な点として挙げることができる。

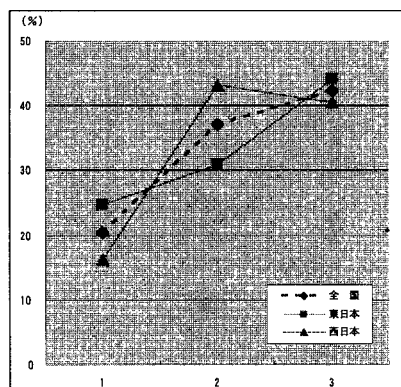
表一2 出身地の違いと色彩の調和性に対する評価(%)

	A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2	C-3
東日本	12	12	13	4.7	7.8	19	7.8	12	12
西日本	8.1	19	15	2.7	14	12	5.4	11	14



	A案	B案	C案
全国	40	30	30
東日本	37	32	31
西日本	42	28	30

図一4 出身地の違いと色相の調和性に対する評価



	1	2	3
全国	21	37	42
東日本	25	31	44
西日本	16	43	41

図一5 出身地の違いと彩度の調和性に対する評価

5. 考察

調査の結果から、地域によって色彩の調和性に対する認知度に差異が認められた。これによりある地域において調和性が高いと認識された色彩が、別の地域においては必ずしも調和性が高いと認識されとは限らないことが確認できた。

公共施設の色彩決定を難しくしている背景には、色彩認識が個人感の差に依存するところが多い点を挙げることができる。今後研究を押し進めていく中で、例えば、色彩認識に影響を及ぼす個人感を形成する要因を、社会的背景、生活的背景、風土・日照などといった遺伝的背景などに分類して説明できれば、景観工学の分野においても大いに役立つのではないかと考える。

(参考文献) 「色彩学」 千々岩英彰 著
「新・カラーイメージ事典」 小林重順/㈱日本カラーデザイン研究所 編・著